履中天皇　百舌鳥耳原南陵ほか外構柵改修工事に伴う立会調査について

はじめに

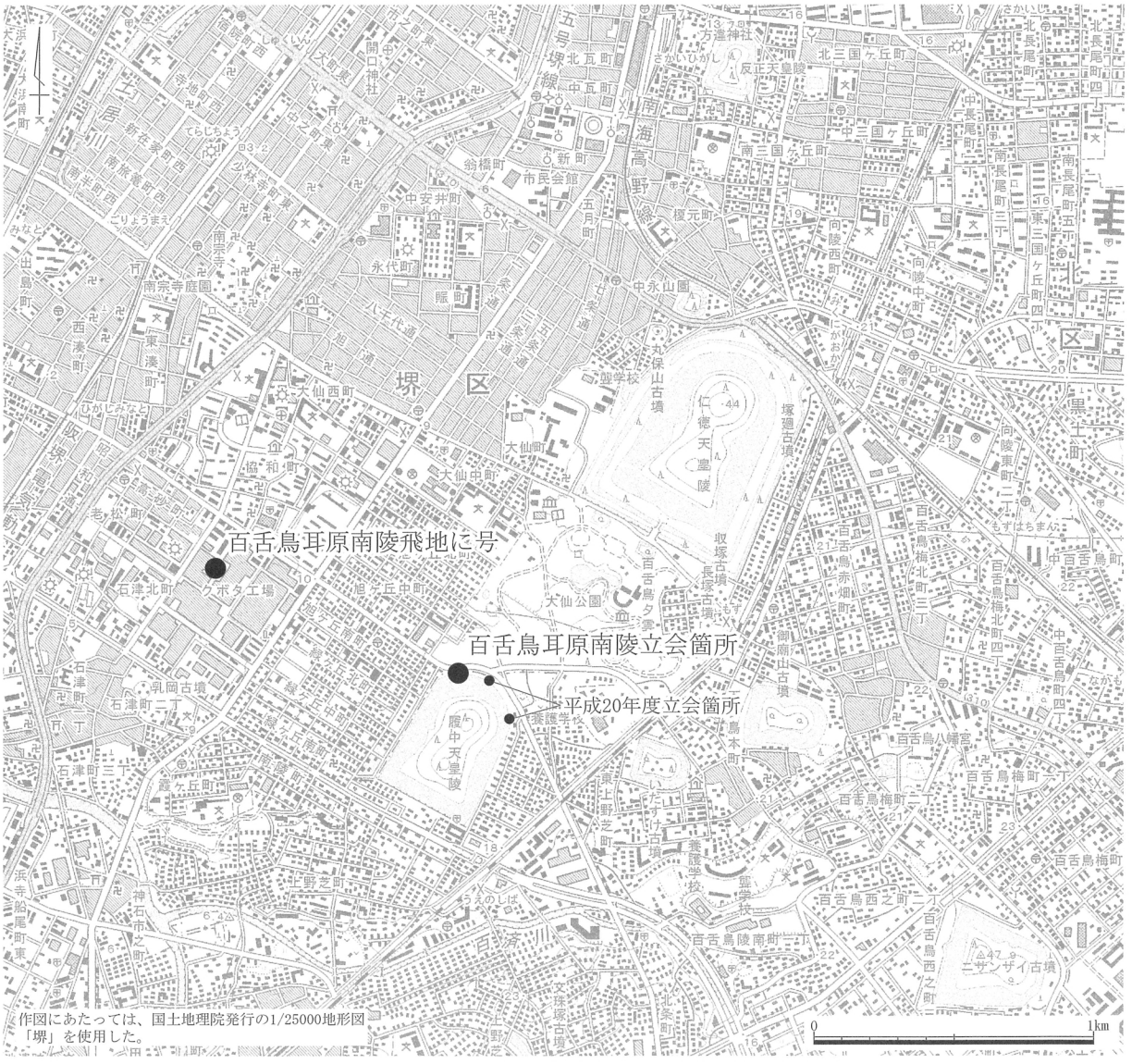
履中天皇百舌鳥耳原南陵は、大阪府堺市西区石津ヶ丘に所在する。本陵は、百舌鳥古墳群の南東に位置し、その北東約1kmには仁徳天皇百舌鳥耳原中陵が所在する（第40図）。標記の外構柵の改修工事に伴う掘削は、近世以降の盛土内掘削であった。ここでは、面的に広く掘削した本陵の立会調査報告と、本陵の飛地に号についても本陵と同時期に外構柵の整備工事に伴う立会を実施したため、こちらも併せて報告をおこなう。また、過去に出土した埴輪等の未報告資料等について、新知見が得られたため、付編として報告する。

陵墓課職員による立会調査は、平成24年1月10日から15日までおこなったが、それ以外の工事期間中は、古市陵墓監区事務所職員が随時立ち会った。

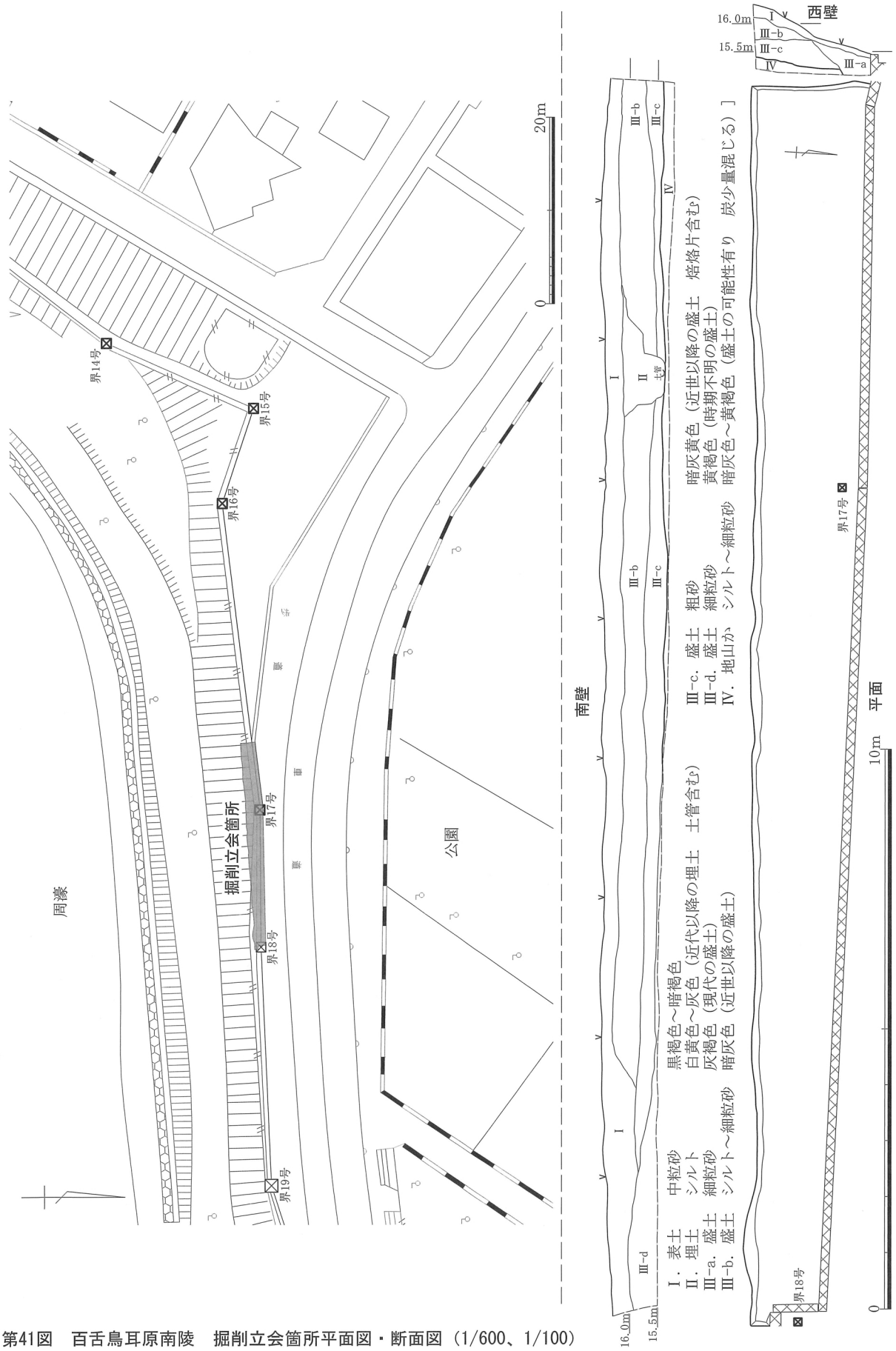
本陵立会箇所（第41図、図版20）

本陵立会箇所における基本層序は、表土（Ⅰ）、埋土（Ⅱ）、盛土（Ⅲ）、地山（Ⅳ）の順である。

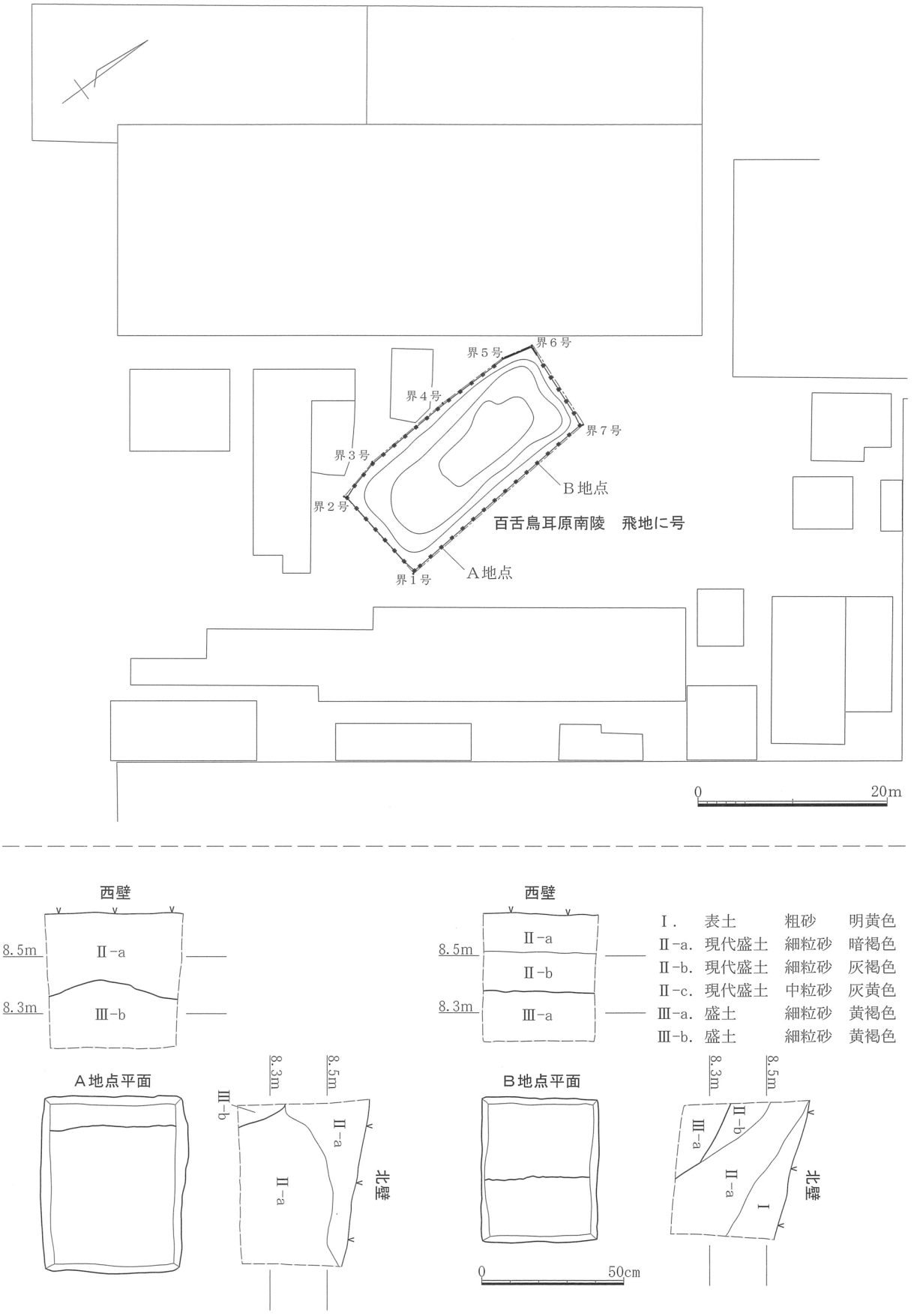
Ⅰ層　表土。色調は黒褐色から暗褐色で、中粒砂から成る。



第40図　百舌鳥耳原南陵　詳細位置図（1/25,000）



第41図　百舌鳥耳原南陵　掘削立会箇所平面図・断面図（1/600、1/100）



第42図　百舌鳥耳原南陵飛地に号　掘削立会箇所平面図・断面図（1/600、1/20）

Ⅱ層　埋土。現代の埋土である。色調は白黄色から灰色で、シルトから成る。現代の土管片が混じることから、土管を埋めるための掘形に充填された土であることが分かる。

Ⅲ層　盛土。色調と粒径および遺物により、aからdまで細別できる。aは旧外構柵設置時の盛土である。色調は灰褐色で、細粒砂から成る。bは近世以降の盛土である。色調は暗灰色で、シルトおよび細粒砂から成る。cは近世以降の盛土である。色調は暗灰黄色で、粗砂から成る。近世の焙烙片が出土している。dは時期不明の盛土である。色調は黄褐色で、細粒砂から成る。

Ⅳ層　地山。色調は暗灰色から黄褐色で、シルトおよび細粒砂から成る。微量であるが炭が混じるため、盛土の可能性もある。

調査地では、地山上に近世以降の盛土と時期不明の盛土が残るのみで、明瞭な遺構は検出されなかった。現状の地山は標高約15.5ｍで、ほぼ平坦である。遺物は、Ⅲｃ層より近世の焙烙が出土している。

飛地に号立会箇所（第42図、図版20）

飛地に号立会箇所における基本層序は、表土（Ⅰ）、現代埋土（Ⅱ）、盛土（Ⅲ）の順である。

Ⅰ層　表土。色調は明黄色で、粗砂から成る。

Ⅱ層　現代盛土。スレート片等を含む現代の盛土である。色調と粒径により、a、b、cに細別できる。aは暗褐色で、細粒砂から成る。bは灰褐色で、細粒砂から成る。cは灰黄色で、中粒砂から成る。

Ⅲ層　盛土。比較的締まった盛土である。a、bと地点で分けているが、色調と粒径は酷似している。双方、遺物の出土が無いため、時期は不明であるが、遺構に伴う盛土の可能性がある。双方、色調は黄褐色で、細粒砂から成る。

飛地に号外周の基礎設置箇所のうち、Ａ地点、Ｂ地点として２箇所について述べる。両地点ともに現代盛土（Ⅱ層）の下に時期不明の盛土（Ⅲ層）が残るのみで、明瞭な遺構は検出されなかった。ただし、Ⅲ層は時期不明の盛土ではあるものの、飛地に号周辺に瓦片が散布している状況から、基壇等の遺構に伴う盛土の可能性もある。遺物は、両地点ともに無かったが、先述した通り、飛地には瓦片等が散布していたため、これらを採集してきた。次に、採集した須恵器と瓦について順に述べる。

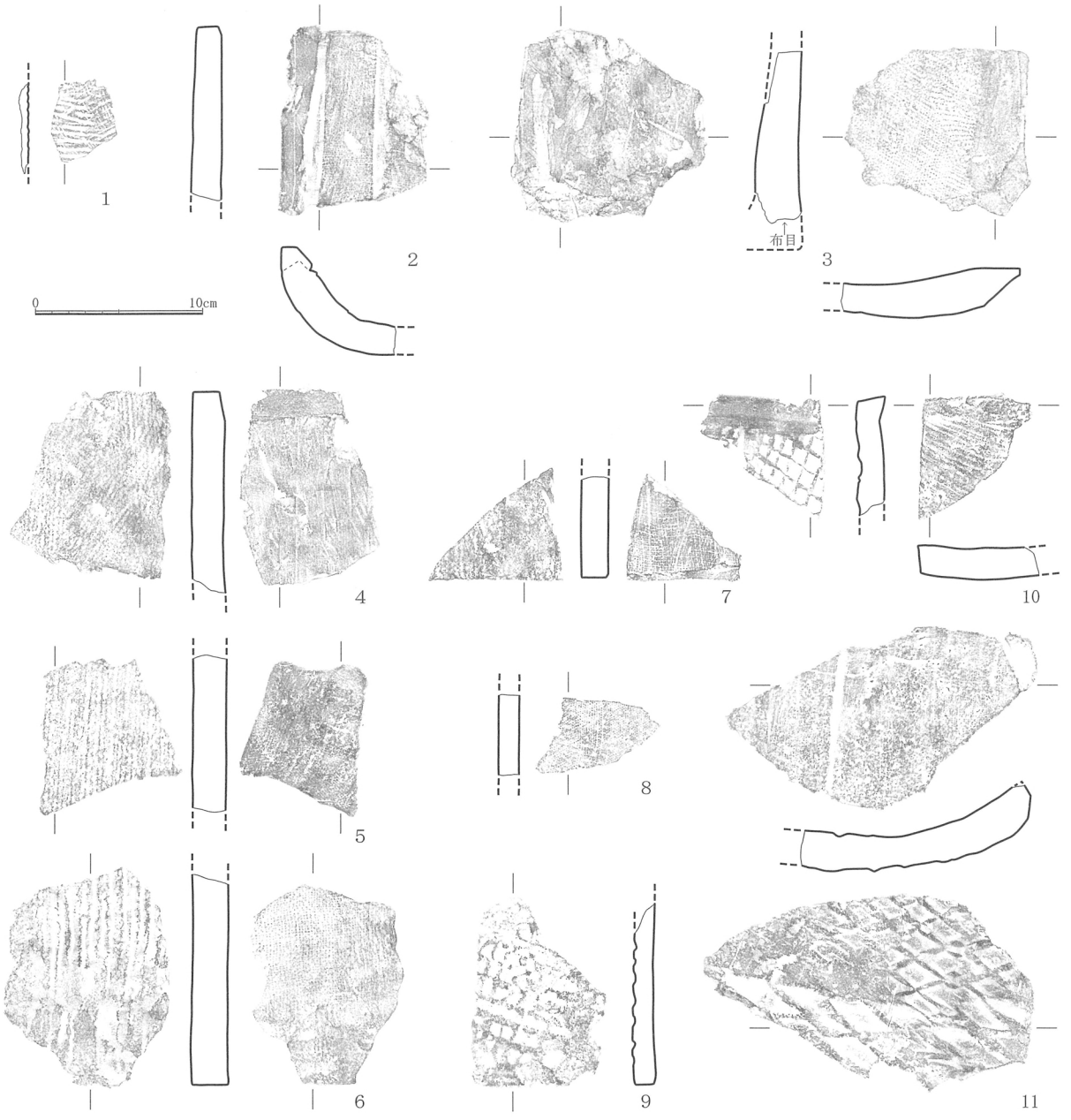
１は須恵器甕の体部片である。内面は破断面で、調整は不明であるが、外面にタタキの痕跡が残る。２は丸瓦である。凹面に布目と模骨の痕跡が残る。凸面はナデを施す。端部に粘土を足した後、ケズリで面を整えている。３は軒平瓦である。瓦当部が失われており、平瓦の端部に布目が残る。凹面に布目、凸面にケズリの痕跡が残る。４は平瓦の狭端部である。凹面に布目、凸面に縄タタキの痕跡が残る。凹面端部をケズリで整えている。５は平瓦である。凹面に布目、凸面に縄タタキの痕跡が残る。６は平瓦の広端部である。凹面に布目、凸面に縄タタキの痕跡が残る。７は平瓦の広端部である。凹面に布目、凸面に縄タタキの痕跡が残る。８は平瓦である。凹面に布目、凸面にナデの痕跡が残る。９は平瓦の広端部である。凹面は摩滅のため調整不明であるが、凸面に格子タタキの痕跡が残る。10は平瓦の狭端部である。凹面に糸切り離し、凸面に格子タタキの痕跡が残る。11は平瓦である。凹面に布目と模骨、凸面に格子タタキの痕跡が残る。上記は総じて古代から中世にかけての遺物群である。

まとめ

今回の本陵立会調査では、平成20年度の立会調査[1]と同様、外堤の一部など明瞭な遺構は確認されなかった。工事掘削範囲の土層は、表土および近世以降の盛土であったため、整備工事は予定どおり施工した。

また、飛地に号立会調査の成果として、古代から中世の瓦片が散布している調査地の状況と周辺に残る塩穴寺の伝承から、調査地近傍に塩穴寺関連の遺構が存在する可能性を指摘することが出来る。ただし、今回の調査地では、明瞭な遺構は確認されず、工事掘削範囲のほとんどが現代の盛土であったため、整備工事は予定どおり施工した。

（横田真吾）



第43図　百舌鳥耳原南陵飛地に号　採集品実測図（1）須恵器・瓦（1/4）

付編

履中天皇　百舌鳥耳原南陵における過去の出土遺物について

今回の立会調査における出土品ではないが、当陵出土品に関する閲覧があった際に所蔵品の現況確認をおこなったところ、未報告資料や新たに接合を確認した資料がでてきたことから、この機会に報告しておきたい（第44～46図）。

今回報告する資料は計7点であり、そのうち1～6が昭和61年に当陵が盗掘された際に回収された資料で、前方部墳頂のA坑からの出土品である[2]。7は昭和40年に西側造出の水際において採集されたものである。

1　本陵　調査地遠景（東から）

2　本陵　調査地南壁　近現代堀込（北から）

3　本陵　調査地全景（東から）

4　本陵　調査地全景　（西から）

5　飛地に号　調査地（東から）

6　飛地に号　全景　ガラス乾板（西からか）

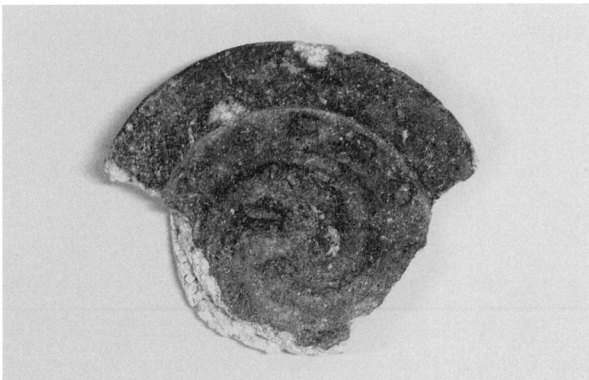
7　飛地に号　A 地点（南東から）

8　飛地に号　B 地点（南東から）

1　百舌鳥耳原南陵飛地に号　採集遺物　瓦

2　伏見桃山陵　軒丸瓦（桐文）

3　伏見桃山陵　軒丸瓦（三巴文）



4　伏見桃山陵　軒丸瓦（三巴文）

5　伏見桃山陵　菊丸瓦